海からきた使い

小川未明

青空文庫

人間が、天国のようすを知りたいと思うように、天使の子供らはどうかして、下界の人間は、どんなような生活をしているか知りたいと思うのであります。

人間は、天国へいってみることはできませんが、天使は、人間の世界へ、降りてくることはできるのでありました。

「お母さま、どうぞ、わたしを一度下界へやってくださいまし。」

天使の子供は、母親に頼んだのであります。けれど、お母さまは、容易にそれを、お許しになりませんでした。

なぜなら、人間は、天使より野蛮であったからです。そして、我が子の身の上に、どんなあやまちがないともかぎらないからでありました。

「どうぞ、お母さま、わたしを一度下界へやってくださいまし。」

と、幾度となく、その小さな天使の一人は、お母さまに頼みました。

毎夜のように、地球は、美しく、紫色に空間に輝いていました。そして、その地球には天使と同じような姿をした人間が住んで、いろいろな、それは、天使たちには、ちょっと想像のつかない生活をしていると、聞いたからでありました。

「それほどまでに、下界へいってみたいなら、やってあげないこともないが、しかし、一度いったなら、三年は、辛抱してこの天国へ帰ってきてはなりません。もし、その決心がついたなら、やってあげましょう……。」と、お母さまはいわれました。

美しい天使は、しばらく考えていました。そして、ついに決心をいたしました。

「三年の間、わたしは下界にいって、辛抱をいたします。そして、いろいろのものを見たり、また、聞いたりしてきます。」と答えました。

天国から、下界に達する道はいくつかありました。赤い船に乗って、雲の間や、波の間を分けてから、怖ろしい旋風に、体をまかせて二日二晩も長い旅をつづけてから、ようやく、下界の海の上に静かに、降りることも、その一つであれば、また、体を雲と化したり、鳥と化したり、露と化したりして、下界の山の上や、とがった建物の屋根のいただきや、野原などに降りることもできたのであります。

天使は、人間の力ではできないことも容易にされたのです。だから、小さなかわいらしい天使が、野蛮な人間の住んでいる下界へ降りてみたいなどと思ったのも無理のないことでありました。

小さな天使は、いつしか下界に降りて、美しい少女となっていました。

ある秋の寒い日のこと、街はずれの大きな家の門辺に立って、家の内からもれるピアノの音と、いい唄声にきき とれていました。あまりに、その音が悲しかったからです。故郷といえば、幾百千里遠いかわからないからです。そして、帰りたいと思っても、いまや、そのすべすらなく、まったく途もなかったからであります。少女は、どうかして、やさしい人の情けによって救われたいと思いました。

空は、時雨のきそうな模様でした。今朝がたから、街の中をさまよっていたのです。たまたまこの家の前にきて、思わず足を止めてしばらく聞きとれたのでした。

そのうちに、街には、燈火がつきました。家のうちのピアノの音はやんで、唄の声もしなくなりました。けれど、哀れな少女は、

この家の前を去ろうとせずに、そこに立っていました。

そのとき、りっぱな洋装をしてお嬢さんが出てきました。お嬢さんはこれから、どこかへ出かけられるようすでした。

「お姉さん、わたしもいっしょにつれていってください。」と、門に立っている少女は、呼びかけました。

お嬢さんは、びっくりして振りかえると、そこにかわいらしい、しかし寒そうな、さびしそうなようすをして、少女が自分の顔を見上げていましたので、この子供は、どこの子だろうかと、くびをかしげたが、思い出せませんでした。

「どうして、私がゆくところを知っているの?」と、お嬢さんはいいました。

「わたしは、お姉さんが、おいでなさるところをよく知っています。お姉さんは、これから舞踏会においでなさるのでしょう。わたしは、おじゃまをいたしませんからどうかつれていってください。わたしは、みなさんの踊りなさるのが見たいのです……。」と、少女は頼みました。

「いいえ、おまえさんをつれてゆくことなどはできません。はやく、お帰りなさい。」と、お嬢さんは、迷惑そうにいって、さっさとあちらへいってしまいました。

少女は、お嬢さんの行方をうらめしそうに見送っていますと、お嬢さんの姿は、夕もやのうちに隠れて、消えていってしまいました。少女は、しかたなく、さびしい方へと歩いてゆきました。

もう日は暮れかかっていました。街を離れると、家の数がだんだん少なくなりました。そのとき、途の上で、ちょうど自分と同じ年ごろの少女が、赤ん坊を負って、子守唄をうたっていました。この子守唄を聞くと、歩いてきた少女は、すっかり感心してしまいました。

「なんという、情けの深い唄だろう。天国にも、これより貴い唄を聞いたことはない。」と、思いました。そして、少女は、近づくと、赤ん坊を負って、唄をうたっている娘にやさしく問いかけたのであります。

「もう日が暮れるじゃありませんか。こんなにおそくなるまで、あなたは外に立って、唄をうたっておいでなさるのですか。」と、少女はいいました。

赤ん坊を負っている娘は、知らない少女ではありましたが、こうやさしく問いかけられると、目に涙をためて、

「お母さんが病気なもんですから、乳をたくさん飲ませることができないのです。なるたけ、赤ちゃんを眠らせるために、こうして、いつまでも外に立って、唄をうたっているのです。」といいました。

少女は、娘のいうことに、深く同情いたしました。

「そんなら、夜中でも起きて、あなたは唄をうたいなさるのですか?」

「夜中でも起きて、私は、牛乳を飲ませたり、泣くときは守りをしなければなりません。」と、娘は、答えました。

美しい、やさしい少女は、感心してしまいました。

「わたしが、今夜、あなたに代わって赤ちゃんの守りをしてあげましょうか……。」と、少女はいいました。

「ありがとうございます。母が、かえって気をもみますから、どうぞお気にかけないでください……。」と、娘は答えました。

少女は、しんせつが、かえって迷惑になってはいけないと思っ

て立ち去りました。

「はやく、あなたのお母さんのおなおりなさるように祈っています。」と、少女は、立ち去るときにいいました。

少女が歩いてきますと、あとから赤ん坊を負った娘が追いかけてきました。そして、少女を呼び止めました。

「あなたのお家はどこですか……。」

少女は、さびしそうに、娘の顔を見て、微笑みながら、

「わたしの家は、遠いんですの……。」と答えました。

娘は、聞いてびっくりしました。

「あなたは、こんなに暗くなって、どうしてお家へお帰りになることができるのですか……。きたない家ですが、今夜、私の家に泊まっていってください。」と、娘は、真心をこめていいました。

「わたしのことなら、どうぞおかまいなく……。」といって、少女は、とっとっとあちらへ去ってしまいました。

その晩は、雨になりました。娘は、うす暗い家のうちで、赤ん坊の守りをしながら、先刻、前を通ったやさしい少女は、いまごろどうしたろうと思って、その身の上を案じていたのです。しかし、この夜から、お母さんの病気は、だんだんいいほうに向かいました。

いつのまにか、冬がきてしまいました。

木枯らしの吹く夜のことです。地の上には、二、三日前に降った大雪がまだ消えずに残っていました。空には、きらきらと星が、すごい雲間に輝いていました。

ここに憐れな年とった按摩がありました。毎晩のように、つえをついて、笛を鳴らしながら、町の中を歩いたのでした。按摩は、坂にかかって、地が凍っているものですから、足をすべらしました。そのはずみに、懐中の財布を落とすと、口が開いて、銀貨や、銅貨がみんなあたりにころがってしまったのでした。

「あ、しまった！」と、按摩はあわてて両手で地面を探しはじめました。

指のさきは、寒さと、冷たさのために痛んで、石ころであるか、土であるか、それとも、銅貨であるかさえ判断がつかなかったのでした。通る人たちは、わき見もせずに、みんな寒いので家の方へ急いでいました。また、通りがかりに、この有り様を見た人の中には、拾ってやって、相手が盲目だから、かえって疑われるようなことがあってはつまらないと思ったり、また、中には、自分で後からきて銭を拾ってやろうと、よくない考えを抱いたような小僧などもありました。

ちょうどこのとき、やさしい少女は通りかかったのです。

「なんという、人間は、浅ましい心をもっているのでしょうか。天国には、こんな考えをもっているようなものや、薄情なものは一人もないのに！」と思いました。

「おじいさん、わたしが、拾ってあげます。」と、少女はいって、銀貨や、銅貨を拾って、按摩の財布の中にいれてやりました。

年とった按摩は、たいへんに喜びました。

「今夜は、道が凍ってすべりますから、出まいかと考えましたのを、出たのでこんなめにあいました。まことにありがとうございます。」といって、幾たびとなく礼を述べました。

やさしい少女は、按摩の手をひいて、家へつれていってやりました。

家では、おばあさんが、こんなに寒く、道がすべるからけがでも

なければいいがと心配していました。そこへ、按摩のおじいさんは、少女に手をひかれて帰ってきました。

おばあさんは、おじいさんから、今夜少女に助けられた話をきくと、たいそう感心して厚くお礼を申しました。二人は、少女に、どうか上がってくれといって、家へいれて、火をたいて暖かにして少女をいたわりました。

「お嬢さんは、この町の人ではないようですが、お家はどこでいらっしゃいますか。」と、おばあさんはたずねました。

少女は、急に、さびしそうな顔つきをしました。

「この世界には、わたしの家というものはないのでございます。わたしは、まったくの独りぼっちで、今日はこの町、明日はあちらの村というふうに歩いています……。」と、少女は答えました。

すると、おばあさんも、おじいさんもあきれた顔つきをしました。

「まあ、そんなら、お母さんも、お父さんもおありなさらぬのですか？」と、二人はたずねました。

「わたしのお母さんも、お父さんも、ここから遠い、遠い、歩いてはゆかれないところにいらっしゃいます。」と、少女は答えました。

おばあさんは、うなずきました。

「二人とも、おなくなりなさったので……あなたは、孤児なんですね。」といって、独りでそうきめてしまいました。

盲目のおじいさんは、おばあさんのそでをひきました。

「やさしい子でもあるし、両親がないというのだから、幸い、家の子にしてはどうだな？」と、顔をおばあさんの方に向けて、小さな声でいいました。

おばあさんは、じろじろと少女のようすを見て、孤児にしては、あまりきれいで、どことなく上品なので、なんらかふに落ちないように小くびを傾けていました。

「そう、おまえさんのように、やすやすときめていいものですか……。」と、怒り声を出していいました。

「おばあさん、よく考えてみるがいい。こんな子供があったら、どれほど、家の役にたつかしれないぜ。」と、按摩はいいました。

おばあさんは、なるほどとうなずきました。そこで、急に、声をやさしくして、少女に向かって、

「どこのお嬢さんですか、知りませんが、いまのお話のような身の上でしたら、私の家の子になってくださいませんか。じつは、私たちは、二人ぎりでさびしくてしかたがないのですから。」と、おばあさんは頼みました。

少女は、遠い、空のかなたのふるさとを思い出しました。いつも、ふるさとのことを思うと悲しくなりました。

「わたしは、ここの家の子になってしまうことができませんけれど、すこしの間でよければ、おてつだいをしてあげます。」と、少女は答えました。

「そんなら、すこしの間でもいいから、てつだいをしてください。」と、二人は頼みました。

やさしい少女は、この日から、おばあさんやおじいさんのてつだいをしてしんせつに、二人のためにつくしたのです。

老人夫婦は、けっして、心の悪い人ではありませんでしたから、少女は、つらいことがあっても我慢をいたしました。そして、夜は、按摩のおじいさんの手を引いて町へもゆきました。

「おじいさん、寒い晩ですこと。」と、少女は、歩きながら、おじいさんに向かって話しました。

「ああ、早く、春になって、暖かになってくれるといい。」と、おじいさんはいいました。

木枯らしが吹いていました。そして、星の光が、ぴかぴかと、いまにも飛びそうに空に光っていました。少女は、じっと、星の光をながめて、ふるさとを思い出していたのであります。

春になりました。海の上は穏やかに、山には、木々の花が咲いて、野原には、緑色の草が芽ぐみました。ある日のこと、町の人々は、海の上に、不思議な景色が見えるとうわさしました。それは、蜃気楼なのであります。

「おばあさん、海の上に、不思議な景色が見えるといいますから、いってみましょう……。」と、少女は、おばあさんにいいました。

「ああ、いいお天気だから、おまえだけいってみておいでなさい。私は年寄りだから、歩くのがたいそうです。」と、おばあさんは答えました。

少女は、独りで、海へいってみたのであります。かぎりもなく、海原は、青々としてかすんでいました。太陽の光は、うららかに、波の上を照らしていました。町の人々は、たくさん海辺へ出て沖の方をながめていました。そのうちに、もうろうとして夢のように、影のように、どこの景色とも知らない、山や、野原や、紫色の屋根などが浮かんで見えたのであります。

「ああ、わたしのふるさとの景色だこと。」といって、少女は飛び上がりました。天国から、下界へきてはや三年の月日がたったのであります。その間にいろいろの人間の生活に触れてみました。しかし、いまやふるさとに帰るときがきたのであります。

町の人々は、不思議な景色が見えなくなると、家の方に帰りましたが、少女だけは、岩の上に立って、沖の方をいっしんに望んでいました。そのうちに、一そうの赤い船が、こちらをさしてこいできたのです。少女を迎えにきたのでした。少女は、それに乗ると、ふたたび天国をさして去りました。このやさしい天使は、永久に、この下界に別れを告げたのでした。

天国には、やさしい天使のお母さんが、我が子の帰るのを待っていられました。三年の間、下界に苦しんできた子供に、なんの変わりもなければいいがと心配していられました。小さな天使は無事に、ふたたびなつかしいお母さんを見ることができました。お母さんは、やはり、心の美しい、汚れない我が子であるとお知りなさると、ほんとうにお喜びになりました。

姉の天使も、弟の天使も、みんなが下界の有り様を知ろうと、このやさしい天使を取り囲んでお話を伺いました。小さなやさしい天使は、下界で見たことと知ったことを語りました。そして、正直な、哀れな人たちに、幸福を与えてやりたいと答えたのであります。

――一九二四・一〇作――

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　4」講談社
　　1977（昭和52）年2月10日第1刷発行
　　1977（昭和52）年C第2刷発行
初出：「少女倶楽部」
　　1925（大正14）年1月
※表題は底本では、「海《うみ》からきた使《つか》い」となっています。
※初出時の表題は「海から来た使ひ」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：富田倫生
2012年2月12日作成
2012年9月27日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

海からきた使い

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/